

月刊「倫風（りんぷう）」6月号より

上廣哲治さんは、「子どもと向き合う5つの基本的な姿勢」として、「見守る」「待つ」「寄り添う」「耳を傾ける」「受け容れる」ことを挙げています。これらのうちの、「受け容れる」ことについて紹介します。

親が子を「受け容れる」ということ 上廣哲治

（前略）子どもが誕生した時、多くの親はこの上なく愛おしく感じ、存在そのものを受け容れるものだと思います。ところが、「子育て」の場面においてはどうか。泣き続けたり、あまり食べなかったり、子どもには育てにくい時期があるものです。また、子どもの気質も身体的特性もさまざまです。育児の難しさ、うまくいかなさを「受け容れられない親が多いのも事実でしょう。

幼児教育の専門家である内田伸子さんの著書によると、お母さんの9割は「育児が辛いことがある」といい、8割弱が「子どもをかわいく思えないことがある」そうです。その理由として、「子どもが思い通りにならない」「子どもの世話により心身が疲労する」「育児に追われて時間や行動に自由がない」などが挙げられています。

実際、幼い子どもを祖父母や親せきなどの多くの大人が見守っていた頃とは違い、核家族化した現代では両親、特に母親に子育ての負担がかかりがちです。内田さんは、「自治体などの支援サービスや、『子育てサロン』なども上手に使って、がんばりすぎず、だれかに寄りかかることも必要である」という趣旨を述べられています。

また、その子の誕生に際しても、親がすぐには受け入れられないケースもあります。そもそも「受け容れる」とはどのような姿勢なのか、1つの例を通して考えてみましょう。

金澤翔子さんをご存じでしょうか。時に力強く、時に伸びやか、時にしなやかな書を通して多くの人に感動を与えている書家です。金澤さんにはダウン症の障害があります。ですから多くの場合、「ダウン症の書家」と紹介されるのですが、私は金澤さんを一人の書家とみています。優れた書家にたまたまダウン症の障害があったのです。

しかし金澤さんが書家として独立するまでの道のりは険しいものでした。母親の泰子さんは、『天使がこの世に降り立てば』という著書に、わが子を受け容れるまでの葛藤を赤裸々に綴っています。高齢出産で生まれたわが子にダウン症の障害があると知った時、泰子さんは絶望のどん底に突き落とされたと感じ、その存在を受け容れることができませんでした。「これではいけない」とは思うものの、奇跡が起きて健常児になってほしいという願いを抑えることができない。時には一緒にこの世から去ろうなどという考えが頭をよぎったこともあった。

なぜ、わが子を受け容れることができないのか、泰子さんは考えます。「優等生でない子は、私は好きではない」「翔子の存在が悪いのではない。いけないのは私の自尊心なのだ。」翔子さんの将来への心配、育児の大変さもあったでしょう。それでも、泰子さんが悩んでいるのをよそに、翔子さんはすくすく順調に育っていきました。

やがて、泰子さんはダウン症も含めて翔子さんを、丸ごと受け容れられるようになっていきます。「子どもは親の所有物ではなく神からの預かりものである。（中略）その人間の良し悪しなど言えるはずもなく、（中略）幸、不幸なぞ軽はずみに言えるものではない。」
「このごろは翔子の顔を見ているとつくづくうれしい。生きていくうえで、よき伴侶ができたという思いでうれしくなる。」

これは金澤さん親子だけのお話ではありません。ご自分のお子さんとの向き合い方を見直してみてください。成績が悪いから、言葉の発達が遅いから、運動神経が鈍いからなど、様々な理由で、子どもを受け容れられずに、子どもに不安な思いをさせてはいないでしょうか。

一方で、世の中に目を向ければ、子どもは学校で能力によって選別され、成長すれば会社でも選別されます。親は子どもに、よい学校、よい会社に入ってほしいと望みます。最近では幼稚園から「お受験」が始まることも珍しくはない。では、そうした評価から零れ落ちたとして、その子は、本当にダメな子でしょうか。社会は画一的な評価しかしません。いや、できないのです。傍らで見守り続けてきた親でなければわからない、その子の良い部分はたくさんある、のにもかかわらずです。

さらに子どもは、学校や友達関係など、“社会”に出ていく中で傷つくことも多々あります。そのうえ親にまで否定されては、立つ瀬がなく行き場がありません。親は、そういう時こそ、わが子の素晴らしい部分を褒め、「あなたは、生きているだけで価値がある」ということを、態度や言葉でしっかりと伝えてあげてほしいのです。このような姿勢で子どもと向き合い、その成長を見守り続けていると、実は親もまた、より善き人生を送ることになる。人生をより深く味わえるようになるはずなのです。

泰子さんはこのようにも書いています。「翔子の心の有り様を丁寧に見ながら苦楽を共にしていたら、いつの時からか、私の心も深く遥かな世界につながった。（中略）翔子を授かる前、私には天空がきちっと見えてはいなかった。「（今は）時空の深さが見えてきた。見えなかった物が見えてきたのです。」

最後に、「受け容れる」姿勢に関して「甘すぎやしないか」「厳しい面も必要ではないか」というご指摘があるかもしれません。

もちろん、家庭での躾は重要です。人として守るべき最低限の規範は教える必要があります。しかしそれは、必ずしも厳しくするというのではなく、言葉だけで教えるものでもありません。生きる上で大切なことは、親の生き方やその子との接し方によって伝わるものです。

十分に愛された子どもは、人が生まれながらにもっている、倫理的な力を発揮しやすくなります。自分が大切にされ、受け容れられた経験を通して、他者に対してもやさしく接することができる。そして社会に出れば、そこでまたさまざまな恩愛を受け、ルールを学んでいくでしょう。「社会の恩」によって立派に成長したならば、親にできることは、信じて「受け容れ」「見守る」ことだけです。